



鈴木俊明氏に聞く
すずき・としあき
▽1962年生▽86年 京都大学 医学部短期大学卒業
▽1962年生▽86年 京都大学 医学部短期大学卒業
▽89年 佛光大学 社会学部短期大学 医学部短期大学 助教授、関西鍼灸短期大学 講師、助教授、関西鍼灸大学 助教授などを経て2007年より現職▽博士(医学) (藤田保健衛生大学)。

理学療法と鍼灸(しんきゅう)のコラボレーション「経穴(けいけつ)刺激理学療法」。経穴・経絡(けいらく)の理論を取り入れた理学療法で、症状に関するツボを「はり」ではなく「指」で刺激するのがポイントという。今回は、この治療の考案者である鈴木俊明氏に研究の最新事情など聞いた。

―まず、治療の実際から。
【鈴木】 経穴刺激理学療法は、動作分析から「筋緊張異常」が問題であると判断した場合に用います。運動療法で患者さんの動作を治療する際に有効と考えられる経穴を、筋緊張を抑制したい場合には垂直方向に、筋緊張を高める場合は斜め方向に指で圧迫します。圧迫する時間は症状に応じて異なりませんが、一分間から五分間程度です。脳血管障害片まひの患者さんやパーキンソン病の患者さんの理学療法に、この方法を取り入れることで従来より大きな効果が得られることを確認しています。

―研究の現状など。
【鈴木】 経穴刺激理学療法が考案されたのは単なる偶然ではなく、長年行ってきたジストニアの患者さんへの鍼治療を確立する研究から生み出されました。西洋医学では治らなかった患者さんに鍼治療を行うと、十回(週一回)の鍼治療で約70%近くの患者さんに何らかの改善が認められ、この治療効果を罹患(りかん)筋の動作筋電図変化や筋電図反応時間を用いて検討されています。その成績は非常に高く、国内外からも注目を浴びています。ちなみに、これらの成果は国内外のさまざまな学術雑誌や学術大

会だけではなく、患者さんやご家族を対象とした講演会でも発表し、紹介されています。―最後に一言。
【鈴木】 関西理学療法学会の会長として、若手研究者の育成も急がれます。学生・卒業生にも理学療法の発展と、患者さんの健康に寄与する研究活動を行ってほしいと考えています。また、良い研究を行うためには二つの条件があると考えています。第一は「研究者としての情熱」で、患者さんに良くなっていたらどうか、どうしたら良いかを常に考えることが大切です。そして、第二は「研究に対するアイデア」で、これは情熱にもつながるところがありますが、患者さんの反応に對して「なぜ、どうして」と常に考えることが大切です。それが研究のアイデアを作り出し、アイデアを持ち続けられれば研究も広がり続けます。最後に第三は「研究の環境」で、これは研究機器が充実しているか否かの問題ではなく、良い指導者がいるかどうかです。ちなみに、筋電図を使った研究は京都大学名誉教授の藤原哲司先生に指導していただきましとを第一に考え、理学療法と鍼灸の可能性を追求していかなければなりません。

～理学療法と鍼灸を融合させた「経穴刺激理学療法」～
「リハビリテーション」研究最前線

「研究の環境」で、これは研究機器が充実しているか否かの問題ではなく、良い指導者がいるかどうかです。ちなみに、筋電図を使った研究は京都大学名誉教授の藤原哲司先生に指導していただきましとを第一に考え、理学療法と鍼灸の可能性を追求していかなければなりません。

Nicolet
VIASYS
HEALTHCARE
Excellence For Life
ニコレー・バイオメディカル・ジャパン株式会社
〒561-0872 大阪府豊中市寺内 2-4-1 (緑地駅ビル) Tel. 06(6866)3500
〒160-0023 東京都新宿区西新宿 4-32-12 (西新宿フォレスト) Tel. 03(3320)0661